

# Mari Yamazaki to the Holy Islands

A man and a woman are in a small, narrow boat on a body of water. The man is standing at the stern, holding a long wooden pole. The woman is seated at the bow, facing him. The boat is dark-colored and has a small motor at the stern. The water is a bright blue-green color.

「沖縄はここ数年、毎年のように訪れています」と語るのは、『テルマエ・ロマエ』の作者であり漫画家・文筆家として活躍するヤマザキマリさん。

二〇一二年五月に復帰五〇周年を迎えるますます注目を集めます。

沖縄の魅力を探りに、沖縄島から宮古島、伊良部島を旅する。

伊良部島の隣、下地島の北側に広がる「下地島空港RW17END」(通称「17エンド」)。沖縄などでサバニと呼ばれる木造漁船に乗って。





# 島の南部に 点在する 遺跡の数々

沖

縄が日本に返還されたその年、ヴィオラ奏者である母が所属していた札幌のオーケストラが遠征公演をすることになった。その時、沖縄がどんなところなのかも知らない幼い娘たちに彼女が持ってきたお土産は、どこかの浜辺で見つけたという殻に六本の尖ったツノのついた貝殻だった。これね貝形のお守りなんだつて。沖縄の海にはこんな貝があるのよ、と母の説明は至極あつさりしていたが、今思えば、私の沖縄への興味の発端はあ



斎場御嶽

二〇〇〇年一二月に世界遺産登録された、琉球王国最高といわれる聖地。御嶽内の三庫理写真1は、当面の間立ち入り制限が行われているため、柵の移動や立ち入りは不可。沖縄県南城市知念字久手堅地内

私

が沖縄を初めて訪れたのはそれから三〇年近くも経つてからだ。この取材で何度目になるのかもう覚えてもらえないが、今回足を運んだ南部には、実はこれまでほとんど行ったことがなかった。一度だけ夫と息子の三人でレンタカーを借りてざつくり巡ったことはあったが、古代文化に強い関心をもつている夫や私が南部に点在する琉球王国の遺跡についてまったく情報

後を歩いていた現地に住むカメラマンのO氏から「ヤマザキさん、こから久高島が見えますよ」(写真2)と声を掛けられた。振り返ると太陽の光を反射して水面を光らせている海の向こうに島影が見えた。

「あの島は琉球民族発祥の地であり、神の島です。だから観光で訪れる場合にもいろいろと制限があるんです」とO氏が説明を加えた。神の世界であるニライカナイに住むアマミキヨが舞い降りたのが久高島であり、琉球の歴史はまさ

の貝殻にあつたようだ。思議に思う。

戦争の苦い記憶を簡単に忘却できず、いた当時の母にとって、沖縄は



斎場御嶽には6つの拝所があり、祈りの場所にふさわしい厳かな空気に包まれている。拝所をつなぐ道々にも豊かな緑が広がる。

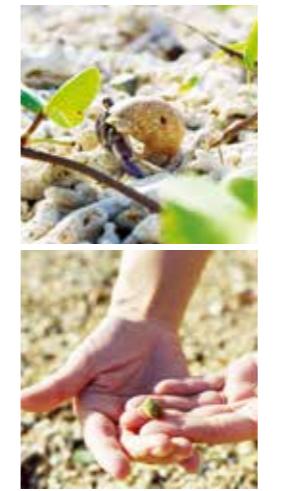


意味では完璧と言つていい。あまりの足場の悪さにサンダルを履いてしまったことを後悔するが、いざとなつたら裸足になる覚悟を決める。神の宿る場所というのは、そう簡単に到達できるものではない。昔テレビでやつてはならない。昔テレビでやつていた人跡未踏の地をゆく探検隊のシーンを頭に思い浮かべつつ、頭上に枝を張つている巨大な樹木からだりと垂れ下がつていてる気根にターザンしながら両手でしがみつき、ぬかるんだ土に足をずるずる滑らせながらほとんど勢い任せに起伏の上り下りを繰り返す。沖縄の自然は人間のような甘やかされた生き物にはまったくもつて容れないと、突然目に現れた。どんな遺跡を訪れる時でも私が一番興奮を見る瞬間だ。計り知れない労力が費やされたであろうとした建物には、強烈な存在感が封じ込められている。堅く積まれた石の壁はまるで歐洲や中東に残る中世の古城とそつくりで驚くが、Webサイトで見つけた解説を読めば築城時期はおよそ一二〇一三世紀とあるから、ほほ私が頭に思い浮かべたいくつかの十字軍の城と同じ時期のものになる。

こ  
こ一〇年ほど、日本に  
戻っている間一度は必ず沖縄で数日間過ごすのが恒例になつてゐるが、宿泊する時は一番最初に沖縄に滞在した時から北部の本部町が今帰仁村と決めている。初めて滞在した沖縄が北部中心だった理由は、当時ボルトガルの里斯ボンの小学校に通つていた息子にある。日本の知人から送られてきたDVDに「沖縄美ら海水族館」で飼育されている人工尾びれをつけたイルカのドギ

スマートフォンで出入り口と思しき木材で補強がされた場所に腰掛けている写真を撮つてもらつたが、画像を見ると一般的な人々がイメージする沖縄らしさは微塵もない。海外の古城の遺跡で撮影したものと人を寄せ付けない立地\*といふは時間の経過によつて自然と一体化している。

何世紀にもわたつて雨風や強烈な日光に晒されてきた琉球石灰岩のブロックの隙間に元気に根を張る南国の植物に、人間の築いた文化に寄り添う自然の寛容さを感じ取る。琉球の神はそうした細部にも間違ひなく宿つてゐる。



## 崇高で 地に漂う 神聖な気配

### 知念城跡

国指定史跡の城跡。切り石積みのミーヴスク(新城)と自然石を積んだクーベスク(古城)と呼ばれる。二つの郭からできている。  
沖縄県南城市知念字知念1033-3

### 糸数城跡

沖縄島南部で最大級のグスク。琉球石灰岩を積み上げた城壁が広域にわたり築かれており、まるで中世を思わせる景観。沖縄県南城市糸数字糸数133

### 玉城城跡

標高一八〇mの天然の要塞に築かれ、その仰ぎ見る様子から天空の城と称される。城門まで登ると、天気のいい日には久高島なども望める。  
沖縄県南城市玉城字玉城444

